

Edith Wharton の小説

“The Age of Innocence” についての覚書

石 本 キ ミ

アメリカ文学の grand dame, Edith Wharton は二つの世界で豊かな生涯を送つたと言われるが、これは彼女がアメリカとヨーロッパに於て豪華な生活を営んだという事と、社交界と文学の世界とに於て稔り豊かな生活を送つたという事と二重の意味があると私は思う。彼女は新大陸殖民の祖先として誇り高い富裕な家柄に Edith Newbold Jones として 1862 年 New York に生れた。今年彼女の生誕百年に当る。十七才で社交界に出て間もなく父に連れられて欧州旅行に出かけた。当時のアメリカの上流家庭の教育の一つとして出来るだけ子女を欧州の文物に直接触れさせるような努力が屢々なされていた。Edith が父と共に旅館や保養地で過していた頃、既に成人した passionate pilgrim の Henry James は大陸をほつつき歩いて下宿生活をしながら彼の初期の international episodes の材料を集めていた筈である。若い Henry James に欧州の与えた影響は非常に著しく、遂に彼は国籍を変えるに至つた程であつたが、Edith も欧州の生活を好み結婚後も年々恒例の訪欧旅行をつづけていたが、遂に本拠をパリに構えるに至り、1937 年そこで死ぬまで暮した事によつてもどれ程欧州の首都の生活を楽しんだかが察せられる。Edith Wharton の名前は屢々 Henry James の名前と結びつけて語られているし、又この二人は友人以上の間柄であつたかの様に憶測されもしたが、それは彼女の遺言によつて彼女の書いた手記が 1968 年に公表される筈であるから、その際この事の真偽が明らかにされるであらうと思われている。とに角 Henry James と彼女の出会いは彼女が Wharton 夫人になつてからの事である。

娘時代の Edith は大家の令嬢に相応しく学校にはやられないで主として家庭教師についての勉強をさせられた。それも他家の令嬢たちの語学の勉強は御

の茶会や晩餐会に出ても間に合う程度の日常社交の会話が目標であつたが、Edith は仏独 どちらも自由に読み書き話す事が出来る程に上達していた。後に独乙の Sudermann の書の翻訳 (1902) を出版したのも基礎的な語学の力が十分に若い頃につけられていたからの事である。その他の勉強については二人の兄達が大学で用いた教科書の中から Darwin, Pascal, Coppée と Sir William Hamilton などを取りあげて熱心に読んでいたと云われている。それから父の蔵書は自由に読む事を許されていたので、当時の知識人の読むべきものは一応目を通していたが、積極的に文学の研究をした形跡はなく、殊に当時の新しい文学作品、特にアメリカのものにはあまり触れる機会はなかつたようである。debutant として New York の社交界に出た頃は内気なはにかみ屋であつたが廿三才で Boston の銀行家 Wharton 氏と結婚した頃は実家の家柄にも相応しく、又夫の地位にも似つかわしい堂々たる社交婦人の 貫禄を具えていた。Newport に邸宅を構えた Wharton 夫妻は社交の season には自宅で愛想よく客をもてなす事を無上の楽しみとし、夏は Wharton 氏の 健康のために年々欧州旅行に出かけて行つた。旅行や社交に関しては夫妻の仲は極めて順調に行つたし、子供のないことも旅行好きの彼等には却つて都合のよい事と思えたが、Edith は何時からとも知れず心に巢喰う空虚さに気付くようになった。可成り年令の違う若い妻の虚栄心を満足させるためには喜んで財布の紐を無限に緩めてくれる夫ではあつたが、その溺愛に妻は満足出来ず、夫の教養の足りなさが彼女の物足りない気持の原因であると気付くようになり、それを紛らわすために絶えず文筆を握っている自分を見出すのであつた。物を書く事は幼い頃からの習慣の連続に過ぎないと Edith は云つているが、何時しか彼女は書く事が生活の目的であるかのように書きつづけた。八才の頃からお話を作り、十三才で詩集を父親に出版してもらつた事もあつたが、結婚後十三年を経てやつと著作に自分の生きる道を見出そうと決心した。1913 年遂に破鏡の 歎に遭つたが、却つてその事が彼女にとつては一筋に創作の道に専念する よすがとなつた。

その作品は小説卅二巻、その中六巻は短篇小説集。詩集二巻。Nonfiction 九巻。その他にも翻訳書。編纂書等もあり、非常に龍大な著作を遺している。

その数多い小説の中で Pulitzer Prize を受けた “The Age of Innocence” (1920) はそれより約十年程前に書かれた “Ethan Frome” (1911) と共にアメリカの古典として永く残る作品とされている。“Ethan Frome” は作者が Lenox に住んでいた頃親しんでいた New England の風景を背景として厳しい寒さの中で貧しく佻しく暮す夫婦と若い従妹との三角関係を扱い、惨めで救いのない結末に持つて行っているが、主人公 Ethan が束の間の幸福を若い従妹と味おうと必死の努力を払う姿を描きつつも、彼のような立派な性格の所有者はこのような立場に追いつめられても決して義務を放擲出来ないという鉄則を充分に示している。この小説と setting に於て非常に対照的な作品が “The Age of Innocence” で、これは作者自身がその中で育つて来もし、又その一員でもあつた New York の社交界を背景として、しかも 1870 年代に於けるその社会の人々の生態を描き出している。作者は自国に於てだけではなく欧州の首都でも社交生活を存分に楽しんだ人であるから、客観的に New York の社交界を眺め、外国のそれらと比較し、深い反省と冷静な批判のメスを使つた事と推察される。時代を 1870 年代と限定し、場所と対象を New York の上流階級としているから、歴史小説乃至風俗小説としての匂いも強く興味も深い。石油ランプを用いた Fifth Avenue の大邸宅。十月十五日から一斉に準備にとりかかり十一月から始まる社交の season。個人の邸の舞踏室。避暑地での楽しい行事。婚約発表、結婚式、新婚旅行やそれらに関連した種々の習慣。その折々の人々の服装や室内の装飾、——これについては作者は専門書を公にした程の知識を持つていた。——凡て彼女の熟知している事を彼女の文章の特徴である明快な文体で書き綴っている。

話の筋は至極簡単である。Poland の伯爵と不幸な結婚をしている Countess Ellen Olensky は非道な夫を逃れて New York に帰り社交界に戻ろうとした。彼女の亡き母の実家 Mingott 家では不幸な Ellen に同情し皆で優しく迎え労ってくれるが、外部の人々は出戻りの女が一門の人々と一緒に劇場に姿を現わすのは面白くない事とし、Mingott 家で Ellen の歓迎パーティを催しても出席を断わる人が多く、来た人は内輪の者だけであつた。Ellen の従妹 May Wellands の許婚者である Newland Archer は弁護士で Mingott 家

一統の顧問弁護士の法律事務所に 関係していた。Ellen は彼に 離婚問題の相談相手になつてほしいと依頼し、Mrs. Mingott (Ellen や May の祖母) は Ellen が離婚によつて家名を傷けないで、元の鞘に納まるように Ellen を説得してもらいたいと Newland に頼んだ。その用件のために Newland と Ellen が度々会っている中に二人は互に愛し合うようになり、Newland は May の清純な愛らしさに心ひかれて婚約したものの、既に人妻との恋愛の経験を持っている彼には、Ellen のヨーロッパ的な自由さを身につけた奔放で神秘的な美しさを持つ魅力に抗しきれなくなり、彼女と結婚すべきであると思うようになった。然し Ellen は Newland の助言を容れて家名を傷けないために、一族の名誉のために伯爵との離婚の意図を放棄するように説得されたと同じ理由で May を犠牲にしてまで Newland と一緒になる事は出来ないと拒むので、彼は予定を早めて May との結婚式を挙げて当分 Ellen から遠ざかつていた。而し Ellen が女蕩しの夫の許に帰るといふのは親類達の選ぶ解決法で、これが実現されそうだという事を耳にして、Newland としては反対せざるを得ないで、それを阻止するために半年振りで Ellen に会つた。だがそのため二人の愛情は再燃し、すべてを捨てて、二人が結ばれる事が絶体に必要であると思えた。その頃 May は孕つている事を Ellen に洩らしたので Ellen の家族の者達は May の家庭の幸福のために Ellen を欧州に去らせる事にして、夫と離れてパリで暮してもよいという条件をつけた。Newland は Ellen を追つてパリに行く積りであつたが、May から自分が父親になると聞かされて全く動きがとれなくなつて了つた。

表面に表われた話の筋は唯これだけで別に珍しいものでもなく小説の世界よりは現実の何処にでもざらにあるような三角関係が描かれているだけの事である。唯最後に Epilogue としての一章があり、ここで Newland Archer が廿六年後に自分の生涯を振り返り、先立つて逝つた妻を心から懐しく偲び、自己の功績多い生涯を殆ど満足して眺める姿と、一人前に成長して近々一家をなす筈の長男と共に欧州旅行に出かけ、パリでは息子の提案で Countess Ellen Olensky を訪ねる事になり、息子だけは Ellen のアパートの昇降機で上らせ Newland は自分は古風なのだから階段を登ると云いながらついに屋外のベン

ちに独り留り Ellen の部屋のベランダをしばし見上げた後で独り宿に引あげて了う淡々たる情景で全篇は閉じられている。

ここに挙げたのは主要人物の一部に過ぎず、この他には可成り大勢の人物が登場している。New York の社交界の二つの主流派とも云える二つの家柄が対立しているが、その一つが May Wellands の母や Ellen の母の実家 Mingott 家で、も一つは Newland Archer の母の従兄が当主である Van der Luyden 家である。互いの家に属する者たちが縁組をするので Ellen が Mingott 家に蒙らせるマイナスを Van der Luyden 家が補う事によつて先方の顔も立ちこちらの名誉も保てる事になるので、Van der Luyden 家では一肌脱いで宴会を催し Ellen の社交界復帰のきつかけをこしらえてやる、という風に社交界の人々のデリケートな心の動きが話の筋の底に流れて常に private な問題に大きな波紋をなげかけている。それにしても Catherine Mansom Mingott はその一統に君臨していて一門の人々は事ある毎に彼女にお伺いを立てなければならない。一門の人々は決して不愉快な事を口にしないでただそれとなく仄めかしさえすればよい。

“The persons of their world lived in an atmosphere of faint implications and pale delicacies.” けれどもこの Mingott 刀自の爛眼は人の腹の中を見抜いて、しかも自分のお家大切に万事を取り計らつて、ずばりと何事でも言つてのけ、自分の思い通りに一族の人々を動かす力を持つた大した人物である。彼女は廿八才で夫に死なれて以来一家の長として莫大な財産を運用してもりたてて来た女丈夫である。又 Van der Luyden 夫人や Archer 夫人の言動の周囲に及ぼす影響の甚大さから見れば、この時代の New York の上流家庭は婦人家長制であつたと云えるかも知れない。

この両家の関係者以外の男性の人物の中にはこの階級の家柄、続柄等に関する知識ならば自分の右に出る人はないと自認している老 Jackson 氏や格式を重んじその研究に専念し、いつも時宜に適つた服装をしかもさりげなく着こなしている Leffert 氏、財政的にも素行の点でもだらしなない英国人の Beaufort 氏——この人の破産が plot の中で大きな役割を占めている——等々の様々の人物を作者は第一章で悉く Academy 座の上席に集めて New York 社交界オ

ンパレードを繰り広げ人物個々の紹介を試みている。舞台では Sweden の Christine Nilsson を Prima donna として独乙オペラ “Faust” をアメリカ人に判りやすく伊太利語で演じていた等と全く客観的な描写を試みているのは、この小説全篇を通じてこの部分だけに限られている。それによつて時代や場所を先ず明確に設定するのに十分な効果をあげている。

主人公 Newland Archer が自分の属するクラブのボックス席に悠々と姿を現したのは舞台ではオペラが将に佳境に入らんとする時であつた。何故招待歌劇会に遅れて来たのか？オペラがはねてから Beaufort 家で開かれる舞踏会で Newland は予定を繰り上げて May Wellands との婚約の発表をしたいと思つている。その当の本人である彼がオペラに遅れた理由は次の様に述べられている。

…… in the first place, New York was a metropolis, and perfectly aware that in metropolises it was “not the thing” to arrive early at the opera ; and what was or was not “the thing” played a part as important in Newland Archer’s New York as the inscrutable totem terrors that had ruled the destinies of his forefathers thousands of years ago. (p.2)

New Yorkではオペラに早々かけつけて行く事は “not the thing” なすべき事ではなかつたから、即ち通人のなすべき事ではなかつたので、dilettante の彼はその通念に従つたのである。New York 人士の祖先が totem を恐れたように、“the thing” なすべき事と “not the thing” なすべからざる事とに細心の注意を払わねばならなかつた。更に第二の遅刻の理由は彼は dilettante らしく喜びが甘美なものであればある程前以つてじつと噛みしめて味うのを好んだからだと述べられている。作者は Newland Archer の紹介と同時にこの社会の習慣に触れつつ、Newland がそれに関して充分の関心を持つている事を示している。彼の Academy 座登場以前に一般の観客が辻馬車或いはお抱え馬車で乗りつける様や、場内の描写の客観性は、Newland の知識内容でもある事許りである。彼の出現と共に作者の point of view は Newland の視線にぴつたりと合わされ、読者の注意は Newland に集中させられ、彼の視線を追いつつ場内の知人をぐるりと一瞥し、各人の様子を観察させられる。とりわけ May Wellands が彼から贈られた鈴蘭の花束を抱えている清浄無垢な姿に快心の吐息をつく彼の様子を読者も微笑と共に眺める事が出来る。その後はず

つと一貫した point of view を最後まで持続し、どの章も Newland の居ない章はなく、又彼で始まる章も尠くはない。どの場面にも彼が居て、彼が他の人物を見たり、話しかけたり、耳を傾けたり、考えたりしている。彼を通じてしかわれわれはそれぞれの人物の過去についても、感情の動きについても、何も知る事は出来ないのである。つまり Newland の知らない事は読者も知り得ないので、May が親達の取決めどおりに長い婚約期間に満足して彼の心の危機を理解しようとしなのに対して読者は Newland と共に焦々したり、Ellen が夫の許から夫の秘書と手を携えて逃げ出して、一年余りその人と同棲していたという scandal をオペラの席で聞いたが、Ellen に助言をしなければならない立場に立つても Ellen が語ってくれないかぎり彼には scandal の真偽を確めるような indelicacy も持たないし、さりとて作者はわれわれに耳打ちもしてくれないので、Newland と共に一層好奇心を駆り立てられる。作者の用いたこの方法は非常に効果的で主人公の接触する人々がみな生き生きとした現実性を具えて主人公の関心を得ていると同じように読者に迫つて来る。彼自身の心の動きも “as he mused on these things” とか “these things passed through Newland Archer’s mind as he watched the Countess Olenska.... ” “Newland Archer had been aware of these things,... ” 等の表現が屢々出て来て Henry James の初期の小説のあるものの響を思出させるが、却つて読者の注意を絶えず主人公の上に注がせて一貫した興味を最後まで引きずつて行つてくれる。

さて主人公 Newland Archer は典型的な New York の gentility であり、弁護士といつても当時の富豪の御曹子の職業とは名許りでまるで accessory のようなものであつた。今日われわれが考えるような勤務の条件がある訳もなかつた。殆どすべての富裕な家では先祖が手に入れた不動産の値上りによつて得た金を投資する事により財産を殖しつつ気楽に富を満喫していた。小売商や政治に関係する事は非難の的となるので、株を売つたり買つたりというような事が多く、弁護士とかその見習位が若い者には誂え向きの経験という所であつた。Newland が彼の属する社会の慣習を守るに吝かでないことは、オペラのボックス席に姿を現わすのにも timing を心得ている事でも判るし、彼は人一

倍よく読書をし、思索もし、世間も見て来たし（これから結婚しようという青年にしては少し自信がありすぎると筆者は思う。）知的な事又芸術に関する事ならば自分より優れた人はないと自認していた。劇場での Ellen の服装は “revealing a little more shoulder and bosom than New York was accustomed to seeing” という風に Newland の眼に映じ、“He hated to think of May Wellands, being exposed to the influence of a young woman so careless of the dictates of Taste.” May が Ellen の風潮に染まないことを望みながら、その他の紳士等と一緒になつて Ellen を比難する立場に立っていた。Ellen の方では幼な馴染みの Newland Archer に興味をもっているのも、互に久闊を叙すとすぐに彼女は “Come and see me someday.” と New York の etiquette にはずれた招きを彼にかけるが、彼の方では婚約直後の男が既婚の婦人を訪ねて時間潰しをしやしない位の事は知つておくべき筈だと思つていた。しかし Ellen から重ねて日時を指定しての招きを受けると彼は思いきつて彼女の住居に赴いた。大邸宅に住んでいる彼にはもの珍らしい程の小さな家の異国情緒たつぷりの雰囲気の中で、Ellen は因襲の殻から抜け出したような態度で彼に接し、忌弾のない批判を New Yorker たちに試み、社交界では眉をひそめられるような連中と自由な交際をしているらしかつた。助言を求められていながらも、彼は云わば彼女によつて社交界の因襲に対して開眼されたようなものであつた。それで彼女の離婚問題は彼女中心に考えれば当然認めなければならないと思えた。しかし “The individual is nearly always sacrificed to what is supposed to be the collective interest: people cling to any conviction that keeps the family together — protect the children, if there are any.” と Newland は自分が結ばれる事になつている May の家の側に立つて New York 風に解決をつける様にと説得しなければならない立場であつた。たちまち彼女の魅力の虜となつた彼自身が因襲に対して resistance を試みるようになつた。そして彼女の離婚に絶体反対を唱える第三者に向つて “Women ought to be free—as free as we are” と断固として言いきる程になつた。しかし彼には陋習の網目に巻き込まれているものがそれを打破するためにどれ程の勇気が要るか等は予測出来なかつた。彼は許婚者でありそして

妻となつた May を Antagonist としているのではなく、彼の社会の独りよがりの取りすましたしきたり、習慣を新しく改めたり、服装や装飾なども大体型にはまつたものならばよいものとしたり、女性は何事でもそしらぬ顔をして無邪気を装うのがよいとされる、というような男女の別を設けた道徳の規準等々をひきくるめたものに対しての反撥、そして反逆を試みたのである。

一方 May Wellands はこの時代のこの社会の象徴のような女性で、“The Age of Innocence”の代表者である。“goddess-like”と評され、angel と Newland から呼ばれ、その清らかな姿には鈴蘭が一番似つかわしいと云われていた。婚約の日以来 New York の許婚者らしく Newland は毎日花屋に立寄つて鈴蘭の花束を自分で見立てて彼女にとどけさせていた。彼女の innocence はそのふりをしていながら決して当の Newland にも覺られない見事な innocence で、Newland が Ellen に心引かれている事を知つていながら、可哀想な Ellen に優しくしてあげて下さいと度々たのんでいる。勿論一門の人々が総がかりで家名を守つて呉れるという所に強みもあり、又 Mingotte の祖母様は百万力で御家安泰のために采配を振つて下さるので心強いが、結婚後再発した夫と Ellen の情事を喰いとめるために必死となつて戦つて来た。愛する夫を失うまいと容赦なく確実な手を打ちながら、innocence で錬えあげた武器を以て。自分が不愉快な事を決して口にしないと同じように、夫にも嫌な事を云わせないようにと口を封じる術をいみじくも心得ていて、三度まで Newland が妻に告白しかけたが、三度とも彼女は話を巧みにそらせて、到頭云わせなかつた。そして体裁よく Ellen と夫を円満に別れさせるために May が hostess となり結婚後はじめて家庭を開放して社交界の人々を招いて Ellen の送別会としての宴会を催した。この催しは第一章の Academy 座での Newland と Ellen の出会いに始まる二年許りの二人の交渉の終局となるもので、Newland が Ellen の恋人である事を知っている者許りの衆人環視の中で、彼は彼女に永遠の別離を告げさせられ、二人の情事の結末を公に発表した事になり、彼は手も足も出ないようにさせられて了つた。May はこの計画の成功に勝ち誇つているが、虫も殺さぬ聖女の顔をしている彼女にしては甚だ残忍な遣り口である。

“It was the Old New York way of taking life ‘without effusion of blood’: the way of people who dreaded scandal more than disease, who placed decency

above courage, and who considered that nothing was more ill-bred than 'scenes', except the behaviour of those who gave rise to them. (p.338)

May の強さは決して個性の強さではなく、彼女の属する社会の人々皆が守っている道德の基準に従っている故の強さであつた。彼女の残忍さも因襲や道德を断然守りとおせるための残忍さであつた。彼女のむごさに関連して Newland が May と交す言葉を引用すれば、もし Ellen にとって New York が「天国」みたいと云うのなら、彼女が前に居た所（夫の許）は「地獄」だと云う意味だろうが、結局 Ellen は夫の所に帰る方が仕合せなんじゃないのでしょいかと May が Newland に語っている。

"I don't think I ever heard you say a cruel thing before." "Cruel?"

"Well, watching the contortions of a damned is supposed to be a favourite sport of the angels; but I believe even they don't think people happier in hell." (p.218)

ちなみに Newland は婚約の歡びに酔つて May を "Dear great angel" (p.23) と呼んだ事があつた。Edith Wharton の扱う会話は実に短刀直入の爽快さがありそれぞれの situation に応じて小気味のよい事を人物に喋らせていて面白いし、彼女の師匠 Henry James の dialogue の持つ不明確さは少しもなく、物語の経過の中でそれぞれの人物の感情の変化や問題の取り上げ方の推移をはつきりと示している。

May の馬車に乗つた Newland と Ellen の会話にも、

"Then what, exactly, is your plan for us?" he asked.

"For *us*? But there's no *us* in that sense! We're near each other only if we stay far from each other. Then we can be ourselves. Otherwise we're only Newland Archer, the husband of Ellen Olenska's cousin, and Ellen Olenska, the cousin of Newland Archer's wife, trying to be happy behind the backs of the people who trust them." (pp.293,294)

この恋人たちが互いに激しく求め合いながら、結ばれる事は不可能と充分に承知していたため、却つてその事が互いをより激しく愛慕させる結果となつて行く様子が明らかに語られている。そして New York では皆の監視をのがれて安全に二人だけになれる場所がないので、切羽詰つた恋人たちは美術館の中で、それも人気のない古代美術の showcase の中の陰気な展示品を見ながら語り合つた。

"It seems cruel, that after a while nothing matters... any more than these little things, that used to be necessary and important to forgot-

ten people, and now have to be guessed at under a magnifying glass and labelled: 'Use unknown.' "Yes; but meanwhile..." "Ah, meanwhile—"

"Meanwhile everything matters... that concerns you."

痛々しい程の懊悩でひきちぎられるような気持で二人は打開しようのないめぐり合せを歎き合つたが、別れる前に一度だけはせめても互を与え合つてと約束がなされた。だがそれも実現するに至らなかつた。

"The Age of Innocence" を一たん手にした筆者に最後までこれを読み通させたのは Nevius に "Edith Wharton is a materialist in fiction." と云わせた彼女の服装や種々の舞台装置の凝り方や風俗習慣についての要領のよい描写によつて十九世紀末の New York を知り得る興味もさる事ながら、view point の一貫性によつて主人公を中心として動く世界の精彩な営みやその中に蠢めく人々が皆主人公の意識の中に波紋を起している事、主人公と他の人物との言葉の遣りとりの中に話の方向が明示されている劇的な要素、表面にはなかなか現れないが、二重にも三重にも組立てられて、主要人物とはあまり関係のない人の破産が大きな家の屋台骨を揺がせ、老婦人の卒中の原因となり、主要人物みなに大嵐を引き起す事になるというようなガッチリとした plot の構え、それらが読者をひきつけて十分に納得させつつ本を閉じさせた所以である。道徳意識に絶えず深い関心を持つている点では George Eliot と一脉通じているが、George Eliot のように道徳談義に夢中になつてしばらく物語の方はお預けという事は、短篇小説で修練を積んだ Edith Wharton には決してない。Ambiguous な点が少しも残されない明快な筆致、これも読者の注意を保ちつづけるものである。

さて Mingott tribe の術策の良に捕えられた Newland Archer はその果敢さを示す機会を失つて了い、極めて優柔不断な男性として描かれているようであるが、彼は "the flower of life" を失いはしたが、決して惨めな失意の生涯を送つたのではない事を作者は示している。どんな情熱が彼や彼の恋人を打ちひしいでも、彼等の属する社会の道徳の合法性に従わねばならない事を知つていたのだ。それで最後の章に於ての彼の回顧は失意の人の反省ではなく、

Ellen への思慕の情を潔めて心の奥深くその倂を祀り、それによつて力を得て平々凡々たる中庸の道を歩いて来た事に満足する初老の人の追想である。彼女は物語に出て来る空想の愛人のように抽象化された存在となり、彼が欲しくても手に入れる事が出来なかつたすべてのものの合成体となつて了い、夥しい数の籤に対して唯一つの賞品しかなくて、それを彼は引き当てる事が出来なかつたという諦めで片づけられている。そして拭つても透き通らないガラスのような因襲の下から忍耐と犠牲が様々の花を咲かせたのだという確信を表明している。

Newland Archer の生涯は非常に充実したもので州議会の議員にも再選されたし、博物館、図書館、芸術の振興、慈善事業等々の奉仕に寸時の暇もない位であつた。作者は或は英国の貴族階級が昔からその優れた能力を国家の種々な分野に活して来た事を考えていたのかも知れない。そしてこの時代にはアメリカでは最も手近にある最良の資質を利用する事をしなかつた民主主義の批判をしているのかも知れない。この回想は又 Newland の追憶であると共に幾春秋かを expatriate として欧州で過した作者の郷愁をこめた追想でもある。この作品の出版された 1920 年は第一次大戦後若い世代が、道德に於ても宗教に於ても或いは日常生活の諸般に於ても、善い意味にも悪い意味にもあらゆる羈絆を排除して伸びのびとした成長を見せた頃で、それは New York に限らず、世界中至る所に見られた現象である。“The Age of Innocence” の finale は 1900 年頃と思われるので年代的に可成りのづれはあるが、作者が彼女の父母の時代であり彼女自身の少女時代の New York の追想と執筆時の時代相との懸隔をしみじみ感じてその感情をも含めて表現しているように思われる。劇はすべて幕切れとなつたが、Newland の長男 Dallas は父親とはちがい本格的な建築家として会社に勤めて活躍しその将来を囑望されている事も、父の交際範囲からは爪弾きされていた Beaufort の私生児のような孤児と恋仲になり婚約中である事も、親の代には到底考えられない事であつた。いつしか因襲の縛めも徐々に解かれ、個人の幸福の追求が当然の事となりつつあつたし、日常生活に於ても石油ランプは影をひそめ電燈が燦然と照し、速達便は金釦の少年が届ける時代も過ぎ去り、長距離電話で親子が旅行の打ち合せをする等と時代の推

移を語り、それでも “There is good in the old ways.” との Newland の述懐には Edith Wharton の故郷への懐旧の情がうかがえると共に Newland Archer の選ばせられた人生行路を是認するところは New Englander らしい Moralism の言葉である。 (昭和37年12月)

参 考 書 目

- (1) Edith Wharton : *The Age of Innocence* (The Modern Library)
- (2) *Edith Wharton Treasury*, ed. and with an intro. by Arthur Hobson Quinn (Appleton-Century-Crofts) 1950
- (3) Edith Wharton : *Ethan Frome* (Charles Scribner's Sons) 1958
- (4) *The Best Short Stories of Edith Wharton*, ed. with an intro. by Wayne Andrews, (Charles Scribner's Sons) 1958
- (5) Louis Auchincloss : *Edith Wharton* (Univ. of Minn. Pamphlets)
- (6) Blake Nevius : *Edith Wharton*, A Study of her Fiction (Univ. of Calif. Press) 1953
- (7) Marilyn Jones Lyde : *Edith Wharton, Convention and Morality in the Work of a Novelist* (Univ. of Okla. Press) 1959
- (8) Percy Lubbock : *Portrait of Edith Wharton*, (Appleton-Century-Crofts, Inc.) 1947
- (9) Viola Hopkins : *The Ordering Style of The Age of Innocence*, American Literature Vol.30, Nov. 1958
- (10) Kenneth Bernard : *Imagery and Symbolism in Ethan Frome*, College English Vol. 23, Dec. 1961 No.3
- (11) Beach, J. W. : *The Twenty Century Novel* (Appleton-Century-Crofts, Inc.) 1932.